様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24　年　6　月　10　日現在

機関番号：３２５２０
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009　～2011
課題番号：２１５２０４４８
研究課題名（和文）インターネット上の日本語及びその話者の言語行動に関する社会言語学的日英共同研究
研究課題名（英文）A Sociolinguistic Japan-UK Joint Research of the Japanese Language Online and its Speakers' Interactional Linguistic Behaviour
研究代表者
西村　由起子　(NISHIMURA YUKIKO)
東洋学園大学　・人文学部・教授
研究者番号：７０１９８５１３

研究成果の概要（和文）：
本研究はインターネット上の日本語を分析対象とし、マクロの視点から書き言葉、話し言葉との比較において複数のジャンルにわたる今日のオンライン日本語の特徴を計量的に明らかにした。ミクロの視点からは、オンライン日本語の対人言語活動のうち、ポライトネス、インポライトネス、および誤変換から生じるユーモアの質的分析を行い、言語人類学的見地からケータイ小説を論じ、社会言語学のデジタル領域への分野拡大に至る貢献を国内外に行った。

研究成果の概要（英文）：
This study investigates the Japanese language on the Internet and quantitatively identifies the features of multiple genres of online Japanese in comparison with spoken and written Japanese. It further explores interactional behaviours of Japanese speakers online, qualitatively focusing on politeness, impoliteness, and humour triggered by misconversions, and mobile phone novels from linguistic anthropological perspectives. This research hence contributes to expanding the field of sociolinguistics to the digital arena both nationally and internationally.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学・会言語学
キーワード：①コンピュータコミュニケーション、②話し言葉・書き言葉、③コーパス日本語学、④ポライトネス・インポライトネス、 ⑤掲示板、⑥ケータイ小説、⑦ユーモア、⑧誤変換；

１．研究開始当初の背景

多くの日本語話者がインターネットを経て言語活動を行う今日、ケータイ端末を含むコンピュータを介して使用される日本語には従来観察されてこなかった特徴の出現が指摘されている。この新しい媒体での日本語が、書き言葉、話し言葉に比べてどのような新しい特徴をもつかの分析は、現在の日本語

の全体像を捉える為に必須である。

コンピュータを介したコミュニケーション(Computer-mediated Communication, 以下CMC と略す)の研究は、英語圏では 1990 年代から言語学で取り上げられてきた。第一段階では言語特徴記述に主として焦点があてられてきた。英語に比べて研究蓄積の少ない日本語 CMC に関しては、研究代表者がこの空白を埋めており、研究代表者による一連の研究は、英語に比べてはるかに複雑な文字体系を駆使し、オンラインコミュニティのアイデンティティ維持にも貢献している日本語 CMC の言語的特徴、及び掲示板コミュニティにおける言語行動の特質を、英語 CMC と比較の上明らかにしている。

CMC 研究の第二段階では、単なる言語特徴記述を超え、社会言語学・語用論がこれまで発展させてきた談話・会話分析等による方法論や枠組に基づいた分析が行われるべきであると指摘されている (Androutsopoulos 2006)。具体的には、ポライトネス、オンラインコミュニティ、バリエーション等のテーマに関して、新たな拡大領域として研究を進めるべきであるとの主張である。Androutsopoulos の言う社会言語学的関心に基づく研究として、研究代表者は CMC におけるポライトネス・インポライトネスに取り組み、過去数年にわたり、国内外でその成果を発表してきた。

日本語 CMC 言語研究は英語に比べ研究歴が浅く、取り組むべき多くの課題がある。Nishimura (2008) の学位論文においては、その課題のいくつかを先駆的に取り上げている。まず音声・文字及び CMC 言語のコーパスを作成した。その上で、共通の尺度として品詞及び品詞の下位区分の分布分析により、三者にみられる特質を量的に明らかにした。CMC 言語の中でも、掲示板で用いられる言語を分析対象としたが、掲示板サイトにより、言語特徴が大きく異なり、バリエーションの存在が明らかになった。これは従来の、性別、年代、出身地等、社会言語学調査で用いるバリエーション研究の方法とは異なる研究方法開拓の第一歩と考えられる。日本語 CMC 研究を推進させる立場から、今後の方向性として、蓄積の多い英語での研究成果を参照し、コーパスメソッドにより英語 CMC を研究してきた英国の研究協力者と共同で日本語 CMC の計量分析を進め、更にオンラインでの話者の言語行動、特にポライトネス現象に見られる対人配慮行動について社会言語学日英共同研究を進めるものである。

２．研究の目的

本研究は、マクロの視点から、従来の書き言葉、話し言葉との比較において、今日のインターネット上の日本語はどのような特徴を持つのかを量的に捉え分析し、そしてミクロの視点からは、言語活動が行われる「オンラインコミュニティ」に焦点を置き、オンライン日本語の使用者はどのような対人言語行動を行っているのか、を質的な分析で明らかにすることを目的とする。

インターネットという共通の媒体の上に成立する言語活動は、他言語にも共通にみられるユニバーサルな特徴を持つと同時に、個別言語によって具現されるという点で、ローカルな特徴を併せ持つ。そのため本研究は、英語で発展してきたオンラインディスコース分析と、日本語分析で用いられ発展してきた談話分析の双方の成果を融合する立場を取る。本研究では、分析対象として「オンラインコミュニティ」を取り上げるが、これは話者が対人言語行動を取る場としての「コミュニティ」は、どの言語文化にも存在するという点で、ユニバーサルであるからである。このためこれまでに蓄積のある英語圏での研究成果と比較可能になり、日本語の社会言語学的研究を新しい視点から深化することが可能になる。また、このような研究を遂行する上では、単に質的分析だけでなく、コーパスに基づく量的分析が必須である。日英双方に比較可能な調査・研究法を英国の研究協力者と共同で構築し、質・量の二側面からの分析を目指す。

３．研究の方法

文字言語・音声言語と、CMC 言語とがどのように異なり、どのような点で共通点があるのかを明らかにするためには、音声・文字言語と CMC 言語を共通の尺度で比較しなければならない。方法論としてこれまでの縦割りの音声だけの分析、文字言語のみを扱った研究にとらわれないことが重要である。今日の CMC 言語の出現を契機に、日本語全体像を明らかにする事の必要性は、丸山・田野村 (2007)にも述べられている。この目的のために、大別してマクロの視点の量的及びミクロの視点の質的分析の二種類の方法を用いる。

量的研究では、主に英語を対象としたコーパス言語学で培われた概念や方法の日本語への応用可能性を検討し、日本語に相応しい方法論を構築して応用する。更に日本語分析を目的として開発された、形態素解析等を行う言語処理ツールをオンラインコミュニティ別やトピックの違いによる CMC 言語の分析に活用する。

質的研究には、第一にこれまでの研究代表者の CMC での配慮行動研究の延長として、「オンラインコミュニティの崩壊につながる言語行動」の解析を、複数のポライトネスの理論を比較することにより行い、日本語 CMC 上での言語行動の説明可能な部分と説明困難な部分を明らかにする。第二に新たな分野と

して「ケータイコミュニケーション」を研究対象とするが、ケータイを支える技術との関わりにも言及しつつ日本語/日本文化に特有な現象を英語圏での当該研究との対比しながら明らかにする。

４．研究成果

初年度においては、マクロ分析ではオンライン日本語の範囲を、学位論文で行った研究の掲示板データに加え、ヤフー知恵袋における Q-A データ、及びケータイ上で執筆・講読される小説を分析対象に加えた。比較対象とする書き言葉についても、雑誌記事に加え、印刷・出版された小説、新聞社説及び学術論文を含めた。言語特徴の分布において、日常会話から成る話し言葉から、最も書き言葉的な学術論文に至るバリエーションにおいて連続体を成すことが示され、ジャンル特有の特徴をも明らかにした。こうしたコーパス言語学的アプローチは、大局的視点からの比較を可能とし、日本語の全体像に迫る研究の先駆けとして、重要な意義を持つと言える。この成果は、Corpus Linguistics Conference 及び日本語書き言葉コーパスに関連する国内ワークショップにおいて発表された。

次に、ミクロの視点では、「オンラインコミュニティ」研究として投稿者のインポライトネスが、そのコミュニティにおける「適切さ」の基準に照らしその存続に直接影響することを示し、オンラインコミュニティ研究及びインポライトネス研究に貢献した。ポライトネス研究が対面会話を分析対象としている傾向が多い中、オンライン上でのポライトネス、インポライトネスを研究することで、言語行動に関する日本語の社会言語学的研究を新しい視点から深化した、という点で重要である。また蓄積のある英語圏での研究成果と比較したことで、理論的側面に日本語からの実証を含めた、という点でも意義ある研究である。この成果は、メルボルンで開催された International Pragmatics Conference において発表され論文としても発表した。

前年度の実績を踏まえ、2 年目には方法論での考察を深め、よりコーパス言語学に沿った分析を行った。書き言葉、話し言葉とオンライン日本語の関係を定量的に明らかにし、コーパス言語学会の proceedings に発表した。英語圏での研究に比べて日本語にする計量分析研究成果が非常に少ない中、日本語におけるバリエーションについて、英語における研究成果と量的に比較可能な結果を提供し、且つ国際的に認知される形で発信したことは意義が大きい。

ミクロ視点からの分析では、第一にインポライトネスが、その参加者の「フェイス」と「アイデンティティ」とどのようにかかわるか、に関して、日本語オンラインコミュニティからの新しい知見を明らかにした。さらに、日本語 CMC に特有な現象として、日本語オンラインコミュニケーションでは日常的に起こる誤変換現象について、英語圏において構築されたユーモア理論に基づき、英語圏研究者に対して発信を行った。第三に非標準的表記が観察されるケータイ等のオンライン日本語で、その使用と使用者の対人言語行動との相互関係を明らかにした。以上を海外の国際学会で発表したが、これらは、欧米研究者が経験したことのない現象であるためオンライン言語行動に関する日本語社会言語学研究を国際的に広めた点において意義があり、反響も大きかった。

最終年度には、マクロ研究として、新たな会話データ(インタビューデータ)を加え話し言葉と書き言葉、CMC 言語を統一的に扱うことを論じる国際学会で、これまでの成果を拡大した研究内容の発表を行った。また、ケータイ上でのコミュニケーション・創作活動（ケータイ小説）について言語イデオロギーの視点から論じた論文を英語圏及び日本語圏の読者・研究者対象に出版し、日本語 CMC からニューメディア社会言語学の発展に寄与している。デジタルコミュニケーションでの誤変換に関する研究は欧米で学会発表され、海外の研究者との交流から知見を得、今後の発展に備える。また日本語 CMC に関して、国内の一般市民に対する発信も行った。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５　件）

1) 西村由起子　(2012).「ケータイ小説とリテラシー：言語イデオロギーの視点から」『東洋学園大学紀要』 20 号　165-180.

2) Nishimura, Y. (2010). “Corpus-based Comparison among CMC, Speech and Writing in Japanese” *Proceedings of the Corpus Linguistics Conference CL2009*, Article 138, available from http://ucrel.lancs.ac.uk/publications/cl2009/

3) 西村由起子 (2010). 「話し言葉，書き言葉，そしてオンライン言語をめぐって：日本語全体像をとらえる試みへのパイロットリサーチ」特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップサテライトセッション予稿集 73-84 『文部科学省科学研究費特定領域研究　代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備』

4) Nishimura, Y. (2010). “Impoliteness in Japanese BBS interactions: Observations from message exchanges in two online communities″ Special Issue: Politeness and impoliteness in computer-mediated communication″ *Journal of Politeness Research* 6 (1). 33-55. （査読あり）

5) Nishimura, Y. (2010). “Linguistic and Sociocultural Studies of Japanese Computer-Mediated Communication: A Literature Review” 『東洋学園大学紀要』 18, 329-345.

〔学会発表〕（計　１４件）

1) Nishimura, Y. 2011/11/17. “A comparative linguistic analysis of Japanese speech, writing and CMC: A corpus-based approach ” 2nd International Conference LPTS (Linguistic & Psycholinguistic Approaches to Text Structuring): Across the line of Speech and Writing Variation. Université catholique de Louvain, Louvain-la-Neuve, Belgium

2) 西村由起子 2011/11/12.「日本語インターネット世界を探る:ケータイ小説を中心に」東洋学園大学 公開教養講座, 流山市教育委員会後援　千葉県流山市

3) Nishimura, Y. 2011/7/7. “Textual misconversions in Japanese digital writing as a source of humour” 12th International Pragmatics Conference, University of Manchester, Manchester, UK

4) Nishimura, Y. 2011/6/7. “Humor in/from computer-mediated interaction: Cases of textual misconversions in Japanese digital discourse” 4th International Language in the Media Conference. Language(?) in the Media(?): Rethinking the Field, University of Limerick, Ireland

5) Nishimura, Y. 2011/3/11. “Misconversion as a Source of Humor in Japanese Digital Communication ” Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics (GURT), Georgetown University, Washington DC, USA

6) Nishimura, Y. 2010/9/2. “Linguistic Ideologies of orthography in Japanese: Corpus-based study of non-standard miniature hiragana” Sociolinguistic Symposium 18, University of Southampton, Southampton, UK

7) Nishimura, Y. 2010/6/30. “ Relationship between Face and Identity through an Analysis of Impoliteness: Observations from Japanese BBS Interactions” The Fifth International Symposium on Politeness, Universität Basel, Basel, Switzerland

8) Nishimura, Y. 2010/3/25. “ Misconversions in Japanese computer-mediated writing as a source of laughter: Exploration of the relationship between technology and humour.” At Linguistic Approaches to Funniness, Amusement and Laughter, 1st International Symposium, University of Łódź, Department of Pragmatics, Łódź, Poland.

9) 西村由起子 2010/3/14. 「話し言葉，書き言葉，そしてオンライン言語をめぐって:日本語全体像をとらえる試みへのパイロットリサーチ」特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップサテライトセッション　国立国語研究所　　東京都立川市

10) 西村由起子 2009/10/18.「ケータイ小説をめぐって」 東洋学園大学　ことばを考える会　講演会　東洋学園大学　千葉県流山市

11) Nishimura, Y. 2009/9/4. Linguistic ideologies of literacy in Japan: Observations from Japanese mobile phone novels ” Language in the new media conference, University of Washington, Seattle, WA. USA

12) 西村由起子 2009/7/23. “A Corpus-based Comparison among CMC, Speech and Writing in Japanese ” Corpus Linguistics Conference 2009, University of Liverpool, UK

13) Nishimura, Y. 2009/7/14. “ Impoliteness in Japanese BBS interactions: Observation from message exchanges in two discussion fora” 11th International Pragmatics Conference,

University of Melbourne, Australia

14) Nishimura, Y. 2009/6/19. “Japanese Mobile Phone Novels: Impact of ubiquitous mobile computers among youth in Japan” Computers and Writing Conference, University of California, Davis, CA, USA

〔図書〕(計１　件)

1) Nishimura, Y. 2011. “Japanese *keitai* novels and Ideologies of Literacy”. Crispin Thurlow and Kristine Mroczek eds. *Digital Discourse: Language in the New Media*. 86-109. Oxford Studies in Sociolinguistics. Oxford: Oxford University Press　査読あり　総ページ数　364ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

西村　由起子 (NISHIMURA　YUKIKO)

東洋学園大学・人文学部・教授

研究者番号：70198513

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

該当者なし

(4)研究協力者

Simeon J. Yates

Sheffield Hallam University, UK,

Professor of Communication and Technology and Director, Communication, Culture and Computing Research Institute,

Sheffield Hallam University, UK